

龍馬伝



(7月のごあいさつ)

平成 22 年 7 月 21 日 (水)

電気自動車は、エンジンを切って坂を下っているような感じです。静かで排気音も無く、暴走族も時代遅れになるかも知れません。

NHKの「龍馬伝」は近代日本の出発を描いており、旧時代から抜け出そうとする人物の活躍が楽しい。学生の頃、この時代の変化を、民本主義者として著名な住谷悦治先生の唯物史観的なゼミで「尊王攘夷」が「佐幕開国」と抗争し、「尊王開国」へと変化して行く過程を興味深く聴いた。その後司馬遼の「竜馬がゆく」を読み、時代が龍馬という人間とともに動くのを感じた。

ドラマを見ながら、世の中というものがどのように変化し、人が成長発展して行くかという過程が解り易い。土佐藩の下士である龍馬が、江戸の千葉道場で剣道を修業している時期にペリーの黒船と出会う。

土佐へ帰った龍馬は、武市半平太に誘われて土佐勤王党に入るが、土佐一藩の尊王攘夷にあきたらず脱藩して、諸国の攘夷運動家の影響を受ける。この時期、時代は龍馬の足枷である。その後、勝海舟の知遇を得て「開国論」を聴き航海術に恵心する。海は広い、藩の境界など意味はない。頑固に「攘夷」を唱えるのはもう古い。みんなで支え合って国を守ろう。龍馬は海軍操練所で「開国」を考えつつ塾頭をつとめる。

第一次長州戦争により、勝海舟が海軍奉行を失脚した後、海軍操練所の仲間と貿易事業を営むために「亀山社中」を設立し、後の「海援隊」を育てる。

龍馬は目覚めた。今度は時代が龍馬の意識に決定的な影響を与える。

旧体制を改めるにはどうするのか。今の幕府に、この国の舵取りはできない。新しい体制のためには「大政奉還」による幕府、旧体制の否定が必要であり、それには何としても薩長同盟を実現させる必要があると。

「薩長同盟」の実現に奔走し、「大政奉還」が現実味を帯びる中で、龍馬が後藤象二郎等と、何日にも及んで話し合った結果を長崎から兵庫の船中で「船中八策」としてまとめる。それは大政奉還の新政体八ヶ条であった。後藤象二郎は藩主山内容堂を動かし将軍徳川慶喜へ「船中八策」を大いに含んだ「大政奉還」を勧告させる。

巨大な幕府は崩壊し、日本も時代の眠りから覚めた。そこには社会（経済）と人間の相互作用による歴史の発展がみられる。